2023 年度
札幌市立大学大学院看護学研究科　博士論文要旨

急性心筋梗塞発症後６ヶ月患者のセルフケア行動評価表の開発

札幌市立大学大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程
学籍番号 1775001　氏　名 松野　千代美

Ⅰ．研究の背景

厚生労働省は 2018 年に、急性期病院から自宅に戻るまでの治療計画である地域連携クリティカルパス（Regional Clinical Alliance Path、以下、RCAP）を活用した医療連携体制の構築、および生活習慣病対策の推進を提唱した。

本研究では、生活習慣病の代表的疾患かつ RCAP の対象疾患である急性心筋梗塞（Acute Myocardial Infarction、以下、AMI）に着目した。AMI は再発のリスクが高く、生活習慣の是正と冠危険因子のコントロールが必須である。また、生活習慣病の改善には患者のセルフケアが重要である。しかし、国内外における AMI 発症後のセルフケア行動に関する尺度開発は確認できなかった。

Ⅱ．研究目的

本研究は、AMI 発症後 6 ヶ月患者のセルフケア行動評価表（以下、評価表）の開発と、信頼性および妥当性の検証を目的とした。

Ⅲ．研究デザイン

記述的研究デザインとした。

Ⅳ．研究方法

１．研究１

研究目的は、AMI 発症後６ヶ月が経過した患者の再発予防に向けて推奨、および実践しているセルフケア行動を抽出することであった。

研究 1－1）における研究対象は、日本国内において AMI 発症後の RCAP を活用した再発予防に関する 13 文献とした。文献レビューによりセルフケア行動の記述を収集した。分析方法は、事項言及型の内容分析とした。

研究 1－2）における研究対象は、北海道の AMI 発症後 RCAP である「あんしん連携ノート」を活用していた患者とした。AMI 発症後 6 ヶ月が経過した患者にインタビューを行い、再発予防に向けて実践しているセルフケア行動を収集した。分析方法は、事項言及型の内容分析とした。

２．研究２

研究目的は、評価表の作成および信頼性と妥当性の検証であった。研究対象は、AMI 発症後 6 ヶ月～24 ヶ月が経過したあんしん連携ノート参画機関の患者とした。研究 1 の抽出結果から評価表案を作成し調査を実施した。分析方法は項目分析、妥当性の検証（探索的因子分析、確証的因子分析、本庄（2008）が開発したセルフケア能力を査定する質問紙（以下、SCAQ-30）との相関分析による基準関連妥当性、8 仮説を用いた仮説検証）、および信頼性の検証（クロンバックα 係数の算出による内的整合性、Item-Total 分析、再テスト法による再現性）とした。

Ⅴ．倫理的配慮

札幌市立大学大学院看護学研究科倫理審査会の承認を得た（2021 年度 No.8、2023 年度 No.18）。

Ⅵ．結果

研究 1－1）により、83 コード、18 サブカテゴリ、6 カテゴリを得た。研究 1－2）において、対象者 7 名にインタビューを行った。基本属性は、年齢は 50 歳代が 3 名、60 歳代が 2 名、70 歳代が 2 名であった。性別は男性 6 名、女性 1 名であった。184 コード、42 サブカテゴリ、21 カテゴリを抽出した。研究 1－1）と研究 1－2）の結果を統合し、21 カテゴリを得た。21 カテゴリに含まれた AMI 発症後のセルフケア行動は 44 項目であった。

研究 2 において、44 項目からなる評価表案を作成し調査を行った。9 医療機関に 310 部配布し 115 名から回答を得た（回収率 37.1%、有効回答率 98.3%）。基本属性は、男女比率は約 4 対 1、年齢は 65 歳～80 歳が 65.5%を占めた。AMI 治療後経過期間は 19 ヶ月～24 ヶ月が 41.6%、6 ヶ月～12 ヶ月は 37.2%であった。再テスト評価表案は 3 医療機関に 60 部配布し 21 名から回答を得た(回収率 40.3%、有効回答率 100%)。探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、3 因子 25 項目を得た。因子分析結果の Kaiser-Meyer-Olkin 標本妥当性（以下、KMO）は 0.786($p<0.01$)、Bartlett の球面性検定値の近似 χ^2 値は 1343.307($p<0.01$)であった。第 1 因子は《生活管理行動》で、食事、生活の仕方、体重の記録、体重の維持であった。第 2 因子は《受療行動》で、指示に基づいた検査、治療の受療、結果の説明であった。第 3 因子は《血圧管理行動》で、血圧の測定、記録、結果の説明であった。確証的因子分析によるモデル適合度は、GFI＝0.95、AGFI＝0.94、NFI＝0.93、RMR＝0.11 であった。基準関連妥当性は評価表案の項目と SCAQ-30 との相関は 0.739（$p<0.01$）であった。仮説検証は 3 仮説が $p<0.01$ であった。クロンバック α 係数は 0.869 であった。Item-Total 分析では相関係数 0.3 以上が 24 項目であった。初回と再テストの級内相関係数は 0.930 であった。

Ⅶ．考察

研究 1 において抽出した 44 項目は、文献レビューおよびインタビューの結果を統合した新規のセルフケア行動である。研究 2 において、113 名を対象とした探索的因子分析の KMO、Bartlett 値から因子構造の妥当性、および確証的因子分析のモデル適合度の適切性、基準関連妥当性の正の相関を確認した。仮説検証は 3 仮説が支持された。クロンバック α 係数から内的整合性を確認し、Item-Total 分析の正の相関、級内相関係数から再現性を確認した。したがって、評価表の信頼性、妥当性を確保したといえる。患者は、評価表を活用して再発予防に向けたセルフケア行動を生活管理、受療、血圧管理の側面から系統的に自己評価できる。

Ⅷ．結論

信頼性と妥当性を確認し、AMI 発症後 6 ヶ月患者のセルフケア行動評価表（3 因子 25 項目）を開発した。患者は、評価表の活用により自己課題の発見とセルフケア行動の目標を検討できる可能性がある。今後の課題は、データ数の蓄積と検証の継続、および臨床における実用である。